第三話　神道と水の文化

鎌田東二

はじめに

私は、水に対して神話的・民族的・経験的な関心を持ち続けてきました。そしてその過程で、『水神伝説』という処女作を書きました。それは、水に対する私の関心のありかが圧縮された形でつまっているものです。日本の水信仰に関心を持ち続けている一方で『日本の水をきれいにする会』や『富士山の霊水を考える会』のメンバーの方々とも交流しております。そのような係わりも有りまして、皆さんに『神道と水の文化』というお話をする機会を得た次第です。

いろいろと話の内容を考えたすえ、次の五項目にしぼることにしました。先ず第一は水の語源、あるいは語義は何か。第二は水の神話はどのような形で日本文化の中に伝わっているか。第三は水の神あるいは水の霊とは何だろうか。第四は川屋の空間と糞尿はどのように考えられていたか。特に古代のその問題について考えてみたい。それから最後に第五として水の呪術、水の儀礼によってどのような信仰文化を形成してきたか。だいたい以上の五項目について話をしてみたいと思います。

水の語源

語源というのは大変難しいものです。古代の原義はこれだと確かめる資料が大変少ないからです。従って以下に述べる語源論は、あくまで私の仮説でありますが、水というのは数字の三と関係があると私は考えております。ヒ、フ、ミの『ミ』ですね。数を表わすヒ、フ、ミ、ここに既に水についての象徴的な論理がある。古代人の世界観が数を数える中に既に込められているのです。

例えば、『ヒ』には多元的多層的な意味があります。先ず一番中心になるのは太陽の日だと思います。また、生命が生成

してくる。発展してくる状態を『ムスビ』という言葉で表わします。一番最初にアメノミナカヌシノ神が登場した後で、タカミムスヒノ神、カミムスヒノ神という二柱の『ムスヒ』の神が高天原に出現すると日本神話の中にあります。『ムスヒ』は日本書記では『産霊』と書かれています。古事記では『産巣』のあとに続けて、霊の部分を『日』と書いてあります。従って『霊』と『日』とは古語においては同じ意味を持っていたと考えられます。つまり太陽の光りや霊は生命を育てていく強い力を持っている。いろいろな説がありますが、私は『ヒ』は同時に『炎』の『ホ（ヒ＝火）』とも関係があると考えます。そしてそれは取りも直さず数字の『一』である。

日本の宇宙観あるいは世界観は古事記の神話体系の中では『ヒ』中心です。それは現在の天皇制を保持してきた文化とも関係していることだと思います。というのは太陽の神の子孫であるという神話的背景を『ヒ』の世界観は持っているからです。それを数字の『一』を表わす多様な意味的な繋がりの中で考えていたということです。古代的思考というものは多様な意味を一つの言葉で象徴的に表現しているわけです。我々はそれらを概念的に区分して分析し考えていますが、古代人にとっては、それはもっと連続した一つのシステムと言いますか、繋がりの流れのようなものとして考えられていたのではないか。

ヒ、フ、ミの『フ』というのは、増えてくる、流出してきたり、現れ出て来たりするということを表わすと思います。『ミ』というのはそれが形になる、「身と心」の身とか、あるいは木の実の実であるとか、何か一つの核心というような意味で『ミ』という言葉を使います。また特に神霊を表わす意味で、山の神を『ヤマツミ』とか、海の神を『ワダツミ』とか言うように『ミ』と言います。これは海の『ミ』とか、港の『ミ』とか、そのような『ミ』という言葉が水を表わし、同時に数字の三と繋がっている。だから一、二、三と数が増えている行く中で、目に見えない霊のようなものが次第に発現して行って、物質的な生命を育て、生命として生成・発展していくプロセスをヒ、フ、ミという数字が語っているのではないか。このような解釈は私が一番最初に言い出したものではありません。既に江戸時代末期にはヒ、フ、ミの音についての語源的語義的解釈のようなものが出ていて、特に神道の中でも霊学、あるいは言霊学と言われるような伝統の中で、『天の数歌』としてその解釈がまとめられてきています。それは今私が話しました仮説とは全く同じではありませんが、一から十までの『ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、ココノ、タリ、さらにはモノチ、ヨロズ』までの数の中に全ての宇宙生成の状態あるいはメカニズムが秘められている。『天の数歌』という歌そのものに神話的・呪術的な意味合いと力があ

強いエネルギーに満ち溢れた状態、その産巣日ですからそれが生成してくるという意味です。産巣日とは息子や娘も同じで、蒸気のように湧き起こってくるというような意味合いを持っています。和久産巣日というのは、だから湧き上がってくるように生命が発現してくる様子です。この神の子が『豊宇気毘売神（トヨウケビメノカミ）』。ここで『気』というのは、食べ物を意味します。日本神話の中に、『気』という名前の付く神が二、三神あります。その一つがオオゲツヒメという神です。オオゲツヒメは、阿波の国の神というように国土誕生の神話では言われています。最初にオノコロ島が出来て、その次に淡路島が産まれ、それから四国が出来ます。四国の中の阿波はオオゲツヒメノ神。日本神話には国によって女神男神がいるわけです。国にもある種の陰陽といいますか、男の国つまり土地と女の土地というようなものがあると考えられていて、徳島県の阿波はオオゲツヒメという女神ですね。『オオ』は大きい、強い、偉大なるという尊称詞、『ツ』は接続する意味で、重要なのは『ケ』です。ここでケというのは食べ物のことで、食物神のことをウカノミタマとかウガノミタマという事があります。ウガとかウケとかウカとかですね。トヨウケのウケも同じです。ウカのカも食べ物、食料を意味します。お稲荷さんもウガノミタマとかウカノカミと言われることがあります。カとかケとかいうのは殆ど同じ意味合いを持っていて、もともと人間にとって必要な食べ物を意味しました。この食物神が産まれた。この豊宇気毘売神は伊勢神宮の外宮に奉られています。豊宇気大神宮の主祭神がそれで、内宮の方が天照大御神、つまり日（あるいは陽）の神を奉ってある。外宮が大地からとれる食物神を奉祭する。だからそこから内宮の天照大御神に食物を捧げるということです。この豊宇気の神は水の神の子供として誕生したことが重要です。しかもその水もイザナミノミコトの尿から誕生して来た。このように神話で語られています。

我々が汚穢とする嘔吐物や糞尿から神神が産まれてきて、その神神は金属であったり土であったり水であったりというふうに大地の生産力ないし生命力を持っている、あるいは支配し司る。そのような神神と考えられていたということは非常に重要だと思うのです。現在神道は『ケガレ』を忌むと言われていますが、日本の太古においては、常識的には最もケガレている糞尿から逆に生命力に満ち溢れた神神が誕生して、実際に生産や生命活動を支えている。神話の中には新しく形成された部分と非常に古い古層の部分とがあり、こういう大地の女神で、神話学で言うとグレート・マザー、偉大なる母の神というようにとらえられていますが、このグレート・マザーが死んで、自分の死体からさまざまな作物が産まれてきたり、つまり自分の身を犠牲にして大地の生産性を高めると

いうのは世界中の神話にあるのです。その女神が殺されたり、自ら犠牲になったりして、それによって他の生命が生かされて来る。他の種はそこから発生してくる。その一番生命の源になるのが、イザナミノミコトで、そのイザナミノミコトの汚い部分から誕生してきた神神、それが水、金、土、そのような生命にとって基本的な物質を生み出してくる。

もう一つこれに関連して、オオゲツヒメという神様が出てきたことを話しましたが、このオオゲツヒメの神につぎのような神話があります。

天の岩戸の神話はご存知だと思いますが、スサノオノミコトが乱暴狼籍を働いて、それに怒った天照大御神が岩戸にさしこもった。この天照大御神を再び高天原に呼び戻すために真っ暗になってしまった岩戸の前で神事を行う。その神事の一番華やかな部分をアメノウズメノミコトがやる、つまり歌を歌い舞うわけです。その時に乳房があらわになったり、ホトがあらわになる。ストリップの起源だとか言われていますが、その時に天照大御神が出現して、スサノオノミコトは追放されてしまう。彼は出雲に下り立って、八俣大蛇（マタノオロチ）を退治する。このような日本の神話があります。彼は高天原を追放され、蛇を退治する間に短い挿話があるのです。その部分は皆さんあまりご存知ないと思うのですが、どのような場面かと言いますと、これは五穀の起源を語るエピソードです。追放されたスサノオノミコトは、出雲に下り立つ前に放浪する。ある時、彼は食べ物をオオゲツヒメに求めた。すると、オオゲヒヒメは、鼻、口、尻からさまざまな食べ物を取り出し、それを調理してミコトに奉った。オオゲツヒメは先程言いましたが食べ物の女神です。この時、ミコトはこの振舞いを見て、『汚して奉る』、非常にケガレている、失礼であると怒って、オオゲツヒメを切り殺した。そうすると殺された神の体から頭に蚕、二つの眼から稲種、耳からは粟、鼻からは小豆、ホトからは麦、尻には大豆が発生した。それをカミムスヒノミオヤノミコト、これは出雲の大国主命の母系に当たるような、大地の生産力を象徴する神ですが、この出雲系の神がこれらの種や蚕を取って、蒔いたので五穀が発生するようになった。だからスサノオノミコトがオオゲツヒメを殺さなければ五穀は発生しないことになります。しかも鼻とか口とか尻のようないわばケガレた部分から出てくるもの、それが食べ物になってくる。それを汚いとして切り殺したところから、更に食べ物の基になる種が発生する。神神は自らのケガレた部分から生命力を維持して行く根源を作っていった。これは神話が語っている一番意味深くて古い部分ではないかと思うのです。一般には汚いものをタブーとして敬遠しているのですが、神神の世界においても自然界のバランスにおいても最もケガレているような物に最も生命力

に関与する部分があるという発想が神話の中にある。

もう一つ今話に出てきたスサノオノミコトは天の岩戸の原因をなす悪戯を行う神です。さまざまな悪戯を行った結果、その悪戯に絶え切れなくて姉の天照大御神が岩戸にさしこもる。そして、高天原を含めて世界は光が消えてしまったので、真っ暗になり混乱に陥る。この様な神話ですが、ではスサノオノミコトは、一体どのような事を行ってきたのか。また、スサノオノミコトはどのようにして誕生したか。これらの事を話したいと思います。

さきほどイザナミノミコトがホトから生まれた火の神カグツチを産んだために病み衰えて、嘔吐、いばり、糞をなして、そこから神神がまた誕生して、やがて黄泉国へ行った。イザナギノミコトは黄泉国へ追い掛けて行くわけです。ところが黄泉国で食べ物を食べてしまった。『よもつへぐいをした。』今でもそうですが、食べ物を食べてしまうと、その国の住人になってしまう。リクルートでも食べてしまうと、どうしても義理が出来る。一宿一敵の恩義、仁侠の世界のようですが、日本人であれば、あるいは古代人であればあるほどその家の食べ物を食べてしまうと、その力、支配力、霊力がその家のものになってしまう。そのような考え方というのが非常にあるわけです。今日でも呪術的思考というのはありまして、女性に食事を誘うとか、お茶を飲むとか、そうしてしまうと機会が得られる。そうした部分というのは現代でもあります。食べる事とセックスとは昔から一繋がりの事として考えられてきました。古代であればあるほどその繋がりは大変強い。だからその国のものを食べると、その国の者になってしまう。食べるということは大変重要な意味があったと思います。イザナミノミコトは食べてしまったのです。その国の者になったので元に戻れないと言うのですが、せっかく来てくれたのだから黄泉国の大神と相談してみるのです。その間、私を見ないで下さいと言って別室に籠る。そこで夫であり恋しい妻を追ってきたイザナギノミコトは持っているのですが、ついに待ちきれなくなってのぞいてしまう。鶴の恩返しの民話も同じように見るなと言われて見てしまう。タブーを破ってしまうという世界中に見られるパターンですね。タブーを侵犯することによって新たに別の文化、物語が生まれて来る。そこで見てしまったのですが、イザナミは体中に蛆がたかっていて、頭・手・足・腹・ホト等体の八箇所に雷がおり、雷神が乱舞しているような状態であった。そこで非常に驚き、ケガレたものを見たと思って逃げて行くのですが、イザナミノミコトは怒って追い掛けて行く。その時に呪的逃走というモチーフが出て来るのですが、イザナギが櫛を投げ捨てると竹の子が産まれ、黄泉国の鬼女がそれを食べている間に逃げる。次々に投げるのですが、最後に桃を投げる。すると桃の木が

出来て、鬼女がその木の桃の実を食べている間にヨモツヒラ坂というあの世とこの世を分ける坂を越えることが出来た。そこで大きい岩で黄泉国への入り口を塞いだ。岩を挟んでイザナミとイザナギとが対面した。イザナミは約束を破ったことをなじり、この世に産まれてくる千人の子供を殺すと言った。イザナギはその時、それでは自分は千五百の産屋を建てようと言った。単純計算すると毎年五百人づつ人口が増える計算になるわけです。女神は殺すと言い、男神は増やすと言うわけです。ここにも神話の残酷さと同時に単純に善悪ではないものがあります。ケガレと見えるものから美しいものが発生してきたり、生命になくてはならなものが出てきたり、矛盾した部分、一般論理学的に考えれば矛盾した場面というのは沢山あるのです。この場合もそうなんですね。これは離婚の場合の神話的な原形のようになるわけです。この後でイザナギノミコトが筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原で禊・祓を行う。この時、水の呪術、水の儀礼の原形にもなるものが語られるわけです。黄泉国へ行って死のケガレに触れた。死体が腐っている場面を目にした。そのためにケガレを落とそうとして、禊・祓を行う。この時に注意したいことは場所が日向でなければならないということです。日に向かう場所で行う。ですから単純に水によって清めるということではない。つまり、日と水の力で清めると語られているわけです。禊・祓で様々の神神が誕生します。例えば、ヤソマガツヒノカミ、これは災いをもたらすような神、まがまがしいものをもたらす。次ぎにオオマガツヒノカミ、これも災いをもたらす。さらにカンナオビノカミ、オオナオビノカミ、イズノメノカミというミナシヤノカミ。これらの神はマガツヒを元に戻していく。曲がったものを直すのです。その後に、水の底ではソコツワダツミ、ソコツツツノオ、ナカツワダツミというようにワダツミの神が産まれる。その後に住吉の神。これも海神、水に係わる神です。こうして一番最後に左の目を洗ったときに天照大御神、右の目を洗ったときに月読命、鼻を洗ったときに建速須佐之男命（スサノオノミコト）という三柱の神が産まれた。特に最後に誕生した三人の貴い子供の神、三貴子と書いて、彼等を後継者にしようと考えたわけです。天照大御神は高天原を、月読命は夜の国を、スサノオノミコトには大海原を統治するように定めた。ところが前二者はうまくいくのですが、大海原だけはそうでないわけです。スサノオノミコトは言われたことをしないで、母の国へ行きたいと泣き叫んでいる。スサノオノミコトは水に係わる神ですね。だから拡大すれば水の世界を支配しなさいということになると思うのです。ところが一向にそうせずに、泣き叫んでばかり。その泣き声で青々とした山が全部枯れてしまう位なんです。川・海の全ての水が全部無くなってしまう。あらゆる生命が

全部弱まってしまう状態になった。そこで様々な混乱状態が起こって来るので、見兼ねたイザナギノミコトがどうして泣いているのかと尋ねると、母の国、根堅州国（ネノカタス国）へ行きたいと答えた。それなら行きたい所へ行け。父と子の断絶ですね。ここでこの断絶がなければ、その後の展開はないわけです。ここで初めてスサノオノミコトは放浪し始めるわけです。彼は黄泉国へ行く前にお姉さんの天照大御神に会い、別れを告げる。その時、彼は大変な迫力があるので、自分の国を奪いに来たのではないかと天照大御神は心配する。そこでウケヒという呪術を行う。これは水に係わる一つの儀式です。この時に天照大御神は誤解して、何故ここに来たとスサノオノミコトに問うと、「邪心は無い。母の国へ行くために別れを告げに来た。」と答えた。それではその証は何だということでウケヒを行います。

ウケヒはどうして行うかというと、川の両脇に二神が立ち、それぞれの持ち物を交換するわけです。そこで剣とネックレスを交換し、それぞれがそれを噛みまして息とともに吹き付けると神神が誕生してくる。先ず剣を三つに折って、聖なる水に漬け、それを噛んで息とともに吐いた時に三柱の姫神が生まれた。タギリヒメ、タギツヒメ、イチキシマヒメ。これは厳島神社とか九州の宗像神社に奉られている宗像三神と俗に言われる神です。これらは海の神、水の神とされます。今度は玉を噛んだ方からは五柱の男神が生まれた。その中の一神がアメノオシホミミノミコトと言いまして、この命（ミコト）が天皇家の祖神になるわけです。自分の剣から女神が生まれたので自分の心は清らかだとスサノオノミコトは喜び、有頂天になって乱暴狼籍をする。これが前段なんです。その乱暴というのは農耕を妨害する行為です。どのようなことかと言うと、天照大御神が作っていた田の畔道を切ってしまう。溝を埋めてしまうというように農業灌漑に必要な水の供給を妨げる。高天原でも農耕を行っているわけです。天皇家の祖神は農耕を持って降りてきた。天皇家の物語は、稲作農耕に係わっているわけです。古事記も日本書記も稲作文化に関する神話を中心に語っているわけです。それからもう一つは、後々関係してくるのですが、『大嘗を聞こしめす殿に屎まり散らし』たという点です。つまり大嘗祭を行う最も神聖な神殿に屎をしたのですね。神殿を屎で汚した。その時は咎めだてをしなかったのですが、最後に忌み機屋（イミハタヤ）に、つまり機織りをする部屋に、神の衣を織る神聖な場所にアメノフチコマという馬をさかはぎにはいで投げ入れた。つまり血で汚れた馬の死体を投げ入れた。機織り女は驚いて機織りの針でホトを突いて死んでしまった。それがきっかけで天照大御神は岩戸に籠るわけです。農耕を邪魔し、神殿を汚し、お奉りを行う女性が死んだ。ホトを突いて死んだというのは、

日本書記では天照大御神自身がホトを突いて死んだというような記述になっています。岩戸から再び出て来る時にアメノウズメノミコトが今度はホトを出す。ホトを出すことで新しい生命をもう一度呼び出すという具合に、ホトを出すことが非常に重要な意味を持っているわけです。

いま述べてきたような部分は、水の神神が誕生する。その時に糞尿が媒体になっている。イザナギノミコトの場合もスサノオノミコトの場合もそうです。そして食べ物の神を殺してそこから作物が生まれて来る。汚れたものに触れることによってそれを禊をしようとして、その結果清らかな世界の元になる神神が誕生する。そのせっかく生まれた神神の中の一神は更に再び汚れた状態をこの世に持ち込む、つまり清めと汚れが循環して展開して行くわけです。特にスサノオノミコトは汚れと清まりを媒介するような役割を演じています。前半部分は、乱暴狼藉を行った。しかし、その後八俣大蛇を退治するというような英雄のような位置を得る。実際に『八雲立つ・出雲八重垣つまごみに、八重垣作る、その八重垣を』という和歌を最初につくったと言われるのもスサノオノミコトである。文化英雄神としての性格を持っている。非常に複雑な矛盾を抱えている魅力的な神です。

この辺ではスサノオのミコトを祀る神社は氷川神社ですが、関東一円に三百社近くありまして、但し関東にしかなのですけれども、やはり水と関係がある。スサノオノミコト自身が水と深い関係にあります。例セば八俣大蛇は、八頭の大蛇とされますが、これも水の精霊です。いろいろな説がありますが、洪水をもたらす神、洪水の擬人化であるとか。毎年人身御供のような人柱、農耕がうまく行かない時に、櫛稲田姫、つまり八人の少女の一番末娘が泣いているのを見て、助けようと思って聞くと、毎年ある季節になると八頭八尾の蛇が来て、食べて帰って行くという。そこで助けた少女と結婚してその子孫が大国主命になるというような物語です。スサノオノミコトは蛇に酒をのまして、眠らせ、そのすきに切り殺す。これも水の精霊である八俣大蛇は、水も我々の生命を育む恩恵的な部分と水による氾濫や洪水、自然の暴虐な面と両面持っているわけですが、特に水の荒々しい部分が八俣大蛇に象徴されている。酒と水の精霊とは常に結び付いていまして、水の神と酒、酒造りには清い水が不可欠ということもありますが、日本の場合はさきほどの三輪山の神も姿形が蛇だとされますが、蛇の神は酒造りの本拠地になっていくような神話や技術伝承を持っているわけです。その水の精霊を表す八俣大蛇が自分の分身のような酒をのんで酔い潰れている間に殺される。そしてその尾から草雉剣が出てくる。神話は大変複雑に入り組んだ形になっています。いずれも語られているのは、ケガレの持つ相矛盾する側面、つまりケガレの排除とケ

ガレの取り込みと媒介によって一層の生命力の発現という矛盾した問題です。それではケガレとは何か。

民俗学の方面から考えますと、ケガレにはケとケガレとハレの三つの状態がある。ケといしうのは一般の状態です。我々は皆ケを持っているし、ケの中にいる。食べ物を食べている普通の状態、それをケと言います。いわば『気』です。その気が枯れてくるとケガレというようになる。つまり生命力が衰えてきた状態です。そこでもう一度生命力を呼び戻すためにハレの状態にする。次第に膨らんで行く、張るですね、そのような状態にする。晴れ着を着るとか、祭りの時をつくるわけですね。つまり祭りを行うことで汚れた状態をリフレッシュしようとする。そして大地の生産力の復元をする。そのために様々な儀式を行う。その一つの儀式が禊・祓であります。大祓は、現在六月末と十二月末の二回行われます。

罪・ケガレを水の力で清めるのが大祓です。日本人は、基本的に水の浄化力や生命力に対して強い信頼感がありまして、神社は必ず水垣と言いまして自然の水が湧き出て来るような場所に建てられています。水の無い所に神社は建たないと言っても良いと思います。水が無い場合も必ずそこに水を引いて来て、人工的に水垣を作って水と森を構成するわけです。水と森は神社の二大要素です。南方熊楠が『神社はあらゆる生命のミステリーが起こる場所で、生態系にとって日本人が知らない内にそのバランスを保ってきたのが鎮守の森のような神社である。従って取り壊したりしてはいけない。』と言ったのは興味深いことです。明治時代に一町一村に一社というように神社の統合が進められたのですが、南方や柳田国男は反対しました。特に南方は紀州で強烈な反対運動を展開しました。彼は神社の持つエコロジカルな意味を深く考えなければならないと主張したんです。

大祓祝詞においては、ケガレは四つの段階で語られています。山から海に流れ落ちて海の先の黄泉国に流れて行くというプロセスで語られています。高い山、低い山から流れ落ちてくる速い川の瀬にいますセオリツヒメが大海原に持ち出す。そして潮流が集まってくるような場所に鎮座するハヤアキツヒメという神が罪・ケガレの混じった水流を飲み込む。そして根の国底の国へ行く通路に鎮座するイブキドヌシがこれを根の国底の国へ息吹放つ。そして最後に根の国底の国にいるハヤサスラヒメがそれを持ちさすらって、祓い清めて消失させる。大地の自然力に完全におまかせするような、水の浄化力があるという信仰に支えられて大祓の儀式が行われていた。これは年二回行われる最も重要な国家的な祭儀の一つです。

このように水の神を祭ったり水の霊に通暁する一族が各村にもいましたが、国家的には藤原・中臣氏が水の一族として当たったわけです。大祓を司ったのは中臣氏です。中臣氏が

日本の水を支配してきたわけです。天皇家は日の一族として天照大御神の子孫。藤原・中臣氏はアメノコヤネノミコトという神、天の岩戸の前で祝詞を奏上した神ですが、の子孫になっています。中臣氏は常々水の女、折口信夫がそう言ったのですが、天皇家だけでなく国家的な水の儀礼に係わる女性を差し出し、禊・祓を行なう。大祓は律令国家の国家的祭儀として行われたわけですが、それを中臣氏が行っていた。中臣氏から藤原氏が分かれ、やがて政治の中心になっていきます。つまり神事は中臣氏、政治は藤原氏となるわけです。藤原というのも淵の原で、折口の説では水の女を差し出す一族で、水の呪術を執り行なう。

中臣氏には藤原不比等という鎌足の子供に伝説があります。藤原不比等は水の世界を潜って、龍宮に行って玉を貰う。そして玉によって立身出世を行い、また力を持つことが出来た。このような伝説が語られています。実際に水の神は龍宮のイメージにもあるように宝や豊穣という信仰の対象になりました。弁天様も芸能の神であると同時に財力の神でもあります。インドのサラスファティという水神が日本に入ってきて、日本の古い水の神と習合して弁天信仰が各地に流行るわけです。その信仰は白蛇の信仰と係わってきます。そのような禊・祓や治水術が繋ってくる。

空海も様々な農業灌漑を行ったとされます。空海の伝説にも随分水にちなみむものがありますが、空海のお母さんはタマヨリヒメと言います。霊が寄り付いてくるような女性という意味です。空海の幼名は真魚（まお）と言います。後に水の技術を日本にもたらした代表的な人として語られていますが、彼がおこなった様々な儀式の中でも特筆されるのは御所の近くの御苑、神泉苑での雨乞いの儀式です。龍神を呼び出して雨乞いを実現させた。空海伝説でも大変重要なものです。日本の仏教も雨乞いとか治水術を重視したのです。藤原・中臣氏も宗教的祭儀だけでなく、水に係わる技術的ネットワークを持っていたと考えられます。

川屋空間と水の呪術

最後に三輪山の神のことを話します。三輪山は大和の中心をなす山です。天照大御神が最初に祭られたのも三輪山の麓です。もともと土着の自生えの信仰を持っていた一族が住んでいた所です。そこにはオオモノヌシノカミという神が鎮座していました。その辺り一円の主であるような神霊です。この神霊に関する神話が幾つかありますが、一つは蛇の姿であったということです。現在そこは蛇信仰を強く残しています。そこに狭井神社という神社があり、御神水が出て来る。その水は万病に効くので、関西地方でずっと信仰を集めています。この神の子供にホトタタライツツキヒメという姫がい

る。その姫が実は神武天皇の皇后になっているわけです。

オオモノヌシノカミはある時美人に惚れるわけです。その美人はセワダタラヒメという。美人とは神を祭る女性の代名詞です。その美人が屎をしている時に丹塗(ニヌリ)矢になって屎まれる溝、つまり川屋、を流れて下ってホトに突き刺さった。美人は驚いて走り去り、家に帰ってニヌリ矢を床の間にさすと、ニヌリ矢は麗しい男性になった。そして結婚をして生まれたのが先程の姫なんです。ここに川屋が出てきます。

考えれば汚いような話、何故そうなのかが一般的に考えて理解出来ない。人類学者も言っていますように、爪、垢、髪の毛、唾、体の末端にある部分は常にどの民族でもタブーにされる。それらは『私であって私でない』。大便も尿も体から排泄されますが、やはり私であって私でないものです。常に曖昧なもの、分類出来ない曖昧なものは秩序、社会や世界の秩序の中で位置付け出来ない。変化の激しい部分だからケガレやタブーの対象になったりする。爪の垢を煎じて飲みなさいというのも一種の呪術なんです。つまりその人の持つ霊力を自分に吸収出来るということですね。ロシアの思想家でミハエル・バフチーンという人は、こんなことを言っています。

『屎は陽気な物質で、生殖力や肥沃と繋がりを持っている。糞尿の物語は大地を再生させる。糞尿は宇宙的な再生・生殖を起こすために不可欠の物質であり、またそのことを象徴する物質である。私にとって死体のようなものだが、同時にバクテリアによって大地に吸収されて行く。古代人は科学的にそのメカニズムを知っていたわけではないが、その循環のメカニズムについての直感的な神話的表現を持っていた。』

糞尿や川屋は日本の神話の中でポジティブな意味合いを持っていました。それはある意味で魂が出現する空間だったわけです。川屋は実際の川の側に立てられたのでそう言うのですが、山から生命が伝わってきて、そこを通して新たに生命が再生されて行く、そのような媒体のセンターになるような空間でした。それが川屋であったり産屋であったりする。いずれも水の縁に立てられました。そして水に仕える呪術者の一群がいて、国家体制の中で明確な儀礼上の位置付けが出来たときに藤原氏や中臣氏がそれを支配する。このような流れがあると思います。ひとまずこの辺りで話を終わり、後は質疑の中でお答えいたしたいと思います。

討論

谷口　藤原不比等は大変興味深い人物ですが。

鎌田　藤原不比等は、藤原京あるいはその後の平城京の築造にかなり関与したわけです。上山春平先生や梅原猛先生が言われているように日本の神話がまとめられたのもその時代なんです。律令体制、つまり日本の法律の起源を作ったという

こと、都を建設したということ、それから日本の歴史、正史を編纂した。この三つは国家的な一大事業だと思います。都の建設の一環として下水道もあったと思います。日本文化は古くは縄文、弥生まで遡りますが、現在直接制度的に係わりのあるのはどうも天智天皇、天武天皇、持統天皇、つまり藤原時代なんです。この意味からいろいろな問題の淵源がこの時代にあって面白いと思います。

谷口　藤原不比等が平城京を造った時には技術的にもしっかりしていたと思います。例えば側溝の規模は受持ちの排水面積に正しくリンクしています。水理計算がきちんとされているんです。遷都する時には都市計画がきちんと出来ていたと思います。技術的には大変高度なことだと考えます。

鎌田　そうですか。やはり水の一族。水の信仰上の儀礼以外に技術的にもしっかりしていたのですね。

谷口　外国でも特に水の少ない中近東では、水をコントロールする人は相当の権力を持っていた。水に関する技術を持った人達が権力者の高級官僚として、権力者を側面から支えていた。

栗田　何故男神と女神が対で生まれてくるのでしょうか。

鎌田　日本の神には一人神の系列と対になっている神の系列と二つあります。一番最初に生まれてくるアメノミナカヌシノカミとかタカムスヒ、カミムスヒというのは一人神で独身です。イザナギ、イザナミの前の辺りから対になってくるわけです。古事記ではアメノミナカヌシ以下七柱の神は、独身で体がありません。隠身で、体が形のあるものとして現れていない。それに対してその次の神は、具体的な物に係わって生成したり発展したりするような、そういうものについては男と女が対で神神の発生も語られるのです。直接自然が現象してくるような状態には既に雌雄、陰陽、を考えいたということだと思います。それを生み出して来る以前の生成力に関しては形をなさない。抽象的なエネルギーのような発現として考えていたと思います。陰陽の組合わせ、バランスによって生成してくるという考え方ですね。国にも土地にも全て陰陽があるわけです。

中村　わが国の神話とギリシャ神話とは大変似てると思うんです。そもそもの源はどちらなのかということなんですが、藤原氏が作ったということは中国から来たということですか。

鎌田　大変似ていますね。神話には古い部分と新しい部分とがあります。天武天皇の発案によって編纂が始まり、実際出来たのは元明天皇の時代、藤原不比等が右大臣として活躍していた時代で、中心になって監修したのは不比等だったと思います。従って藤原氏や中臣氏が相当関与した。天皇家と藤原氏がかなり活躍する話になっていますので、いろいろな伝承を相当取捨選択している。政策的に編成したと思いますね。

しかし全部が全部都合の良いようにしたかと言うと、神神が汚れの中から誕生するとか、姫神を殺してそこから穀物が発生するとか、このような部分は縄文時代まで遡ることが出来ると考えられます。縄文の遺跡に出てくる信仰と繋がりのあるようなイメージやシンボルが神話の中に認められるので、それは非常に古い部分なんです。神話を一つの物語として編集して行く時にはある種のストーリーが必要だと思います。従って編集の意図で伝承が変えられることもあるでしょう。ともかく古事記は新しい部分と古い部分と両方持っていると思います。新しい部分には中国の神話とか朝鮮神話とかを参照した部分があります。最も古い部分は各部族が持ち寄ったものが集大成されたと思います。東南アジアにある神話と同じものもある。女神を殺して、そこから様々なものが出てくるというのはギリシャ神話のデメーテル神話にありますし、ポリネシア、オセアニアとかの東南アジア一帯にもあります。神話としては最古層のパターンですね。イザナギが訪問する話等は、ギリシャ神話のオルフェースとエウリディケの話と同じです。神話学ではアンドロメダ神話と言って、起源は一つだろうと考えられています。

日本神話とギリシャ神話の類似性についてもかなり研究されています。ギリシャ神話がスキタイ族に伝わり、その後スキタイ族によってスキタイ、モンゴル、ツングースを経由して朝鮮に入り、朝鮮から日本に伝わったのではないかという学説があります。スキタイ文化を媒体として日本に伝わった。三種の神器、鏡と玉と剣もスキタイの王位の継承儀礼だったのではないか。あるいは天尊降臨の神話が朝鮮神話にある。だから伝播過程でいろいろなものがくっついて日本に伝わり、それを最終的に編成したのが、八世紀初頭の藤原不比等の活躍した時代になるのだろう。ギリシャ神話が伝播したというのも否定出来ないと思います。

西村　仏教との関連性はどうなんでしょうか。

鎌田　神話そのものと仏教との直接の繋がりはありません。ある学者によれば古事記に出てくる様々な概念の中には仏典に出て来るものがある。例えば心が清らかであるとか、ケガレとか、清浄とか汚穢とか。このような概念ですね。六根清浄と言いますが、これらは中国の仏典の中でよく用いられたものです。従って概念そのものには仏典から引かれたものも幾つかあるということは言えると思います。しかし、直接全体的に仏教の影響があるとは言えないと考えます。

神道と仏教の間には分業体制がしっかりとあったのでしょう。律令体制が出来た頃は律令の中でも最初に神祇令、つまり神様についての規定があり、そね次が僧尼令で、つまり神事に係わる事が優先しているわけです。その次に仏式を置く。神事と仏式とはかなり使い分けている。そしていずれも律令

体制を支えていく二つの極になっていた。だから仏教も国家儀礼に深く係わって行きます。奈良の東大寺と春日神社は対になっています。

しかし神仏混淆の芽はこの時代から生まれてきていると思います。神仏習合は明治まで続きますが、神道と仏教の境目がわからないようなのが民衆的なありかただった。民間信仰のレベルでは仏教の影響は神道の中に溶け込むような形で、あるいはそれに理論的な刺激を与えるような形でかなり深く関与したと言えると思います。

中西　水の語源ですが、ミについては分かりましたが、『ヅ』はどういう意味なんでしょうか。

鎌田　津市とか摂津とかという地名の中に『ツ』がありますね。『ツ』は『水のほとり』というような意味だと思います。『ト』とか『ツ』とかはある空間を示す言葉だと思います。特に『ツ』は水に係わって来る場所をさすのです。もともと『ミ』だけで水の事を表していましたが、それに『ツ』が付いた。それからもう一つの考え方は『ミツ』つまり『満ちる』という動詞が名詞化した。連用形は『ミチ』ですが、それが『ミツ』と繋がっていったとも考えられるかもしれません。

熊井　氷川神社は何故関東だけにあるのでしょうか。

鎌田　これは不思議な事です。『翁童論』という本でスサノオノミコト論というのを詳しく論文として書きました。その中で氷川神社の分布が多摩川と元荒川の流域周辺にしかない。他県にあるのは五箇所位です。理由はよく分からないというのが正確なところですが、最初出雲で下り立った所は簸川なんです。神話を伝える一族、出雲系の一族が関東に来た。実際に出雲系の神話は諏訪地方に多いのです。諏訪の一族はタケミナカタと言って、大国主命の子供のタケミナカタが一番最後まで国譲りに抵抗して諏訪地方まで逃げて行った。そこには非常に古い縄文時代の文化があった。そして諏訪は龍神として水の神としても信仰されて行くと同時に、後には農耕が入って農耕神にもなっていく。このような出雲系神話や文化の伝播プロセスもある。関東は、このように出雲的、あるいはもっと古い縄文時代の文化伝統にまで繋がるような、後に坂東武者とか坂東の気風というのはあったと思いますが、非常に古い農耕以前のものもかなり伝えて行くようです。夷の文化もそうですが。そのようなものがかなり残っていたと思います。スサノオノミコトの物語は日本の土着文化のある部分を吸収して出来上がっているのではないかと考えます。その点で山陰、北陸から中部、関東にかけての出雲系の文化が根強くあった。同時に氷川という名前でスサノオノミコトが奉られているのですが、実際にその他に彼が奉られている神社は須佐神社とか熊野神社とか祇園さんとかです。日本全国で神社本庁が登録している神社は約八万社ですが、その中

でスサノオノミコトを奉る神社が一番多い。氷川神社は地域的に限定されていますが、全国的にスサノオノミコトを拝んでいるわけですね。

渡辺　糞という文字は何時頃どのような形で出来たのでしょうか。また糞を久曽と書いたものもある。どのような文字を使ったのでしょう。

鎌田　久曽は音を借りているだけです。だからこの漢字の意味にとらわれない方が良い。ただ米と異、それから古事記でよく使われるのは尸の中に米と書く字ですね。これは一番古く糞の字に当てられています。もともとの日本語そのものは『くそ』で、『くさい』、『くさる』と関係があると思います。物が腐って行く、あるいは臭い。死体も糞尿も変化の過程で強烈な臭気を出す。それが徐々に汚いもの、ケガレたものというように文化的に位置付けられていった、タブー視されて行ったという一面を持っていた。私は常に死と結び付いていたと思います。屎の古代人のイメージは体から出て行く日々の死体のようなもの、自分であって自分でないもの。死が出て行くということは魂が抜けて行くこと。魂との繋がりがあるために、屎まるところに新たな神神が生まれるわけです。死と再生というような空間が考えられて、これが厠になる。あるいは『くさ』、『くす』。『くすし』ですね。不思議だという意味ですが。これは同語源だと思います。『くさい』ということも不思議という意味がありますね。『くさい』の以前に人間にとっての驚きのようなものがあったと思います。屎はいろいろなものに姿を変えていく。溶けたり、土に混じったり。大変不思議な存在だった。

村上　神社の立地に傾向のようなものはあるのでしょうか。

鎌田　これは今後調べて行く必要がある課題だと思います。大変重要な問題点で、研究がなされていない部分でもあります。私の知人のある建築家が神社の立地条件を水との関係で調べています。彼の説によれば神社は一般に地下水を含めて水が豊富に集まってくるような所、湧水のある所に位置しているということです。それからもう一つは鉱物資源がある所。つまり一番古くは水資源、鉱物資源のある所ですね。稲作にからんで農業を行っている地域ではいわば奥山に向かいあっているような場所や地形の所に里宮が建てられています。空間的な諸条件は神社にとって決定的な意味合いを持っていると思いますが、実際にはよく調べられていません。古代の斎場は磐座、つまり特殊な岩に神が宿るというのが多いのです。それでは岩のある所はどこでもそうかと言うと特定の所が選ばれている。古代の産業や技術と神社との係わりも考える必要があります。市場も神社から発祥するので、神様を奉るということは産業に深く係わっているわけです。生活史の中で神社問題を研究する意義は大きいですね。

藤井　屎尿について現在語られないようなことが語られています。何故語られなくなったのか、その推移や文化的条件の違いについてはどうでしょうか。

鎌田　神道がケガレを忌むようになったのは、律令体制そのものにも関係があるのですが、特に強くは平安時代中期頃から中世にかけて『キヨメ』という汚物を処理する業者やケガレを引き受けていく下級神職のような者が生まれてきたことによります。清めのためにケガレを一身に引き受けていく人間とか制度的な位置が明確になるわけです。古代から中世に変わる時にはっきりした分業体制が生まれ、ある部分に押し付けられて行くわけです。ケガレに絶対触れないような人と一身にケガレを引き受ける人の分化ですね。ところが祭の時にこの立場が逆転して、引き受ける方が重要な役割を果たす。これが平安末期から中世にかけて、かなりはっきりした形で出て来るのです。日本文化史の中でケガレの形成は、幾層にもレベルが切り替わっているように思います。古事記が作られた頃にはまだそれほど強くありません。日本の死の文化は稲作農耕文化と対局的に出て来る。やはり縄文文化から引き継いで来るような所があります。

谷口　酒は綺麗な水が欠かせない。今でも神道の儀式では酒が重要な役割を担っていると思います。酒は綺麗な水の象徴なのか、それとも穀物から作られるので稲作文化との関連でもっと深い意味があるのか。酒は何を象徴しているのでしょうか。

鎌田　神様には重要なものからお供え、つまり神饌を奉って行きます。それも左、右、左、右の順番で。一番最初は米です。その次が酒ですね。最後が普通は塩、水です。最初に酒を奉る神社もあります。日本では一般に米が一番象徴的な意味合いをもっています。酒は米にも関係しますが、稲作以前にもあったと考えられます。米以外の物で作る酒ですね。宗教儀式では神と交流するための飲み物として酒は世界中で用いられています。酒を飲むと人間の境界線が消えて行き、そして純粋になって神霊や他者に触れ、その力を貰う。身体的なふれ合いですね。このような気持ちが強くあったと思います。酒に神霊が宿っていて、その霊力をいただくというような呪術的思考があったと思います。

北川　弥生時代以前の狩猟採集文化を伝える部分が神話にはあるのですか。

鎌田　あります。スサノオノミコトの物語の中でもかなり出ていると思います。海を支配する一族は川を通して山の一族と深い係わりを持つわけです。例えば信州の安曇野に船祭があります。安曇というのは北九州の海沿いの、いわば海の民なんです。我々の想像以上に交流があったんです。中世ではそれらを繋ぐのが芸能の民や修験者です。スサノオノミコト

が何故稲作農耕文化以前のものと関係があるのかと言えば、例えばスサノオノミコトは高天原で農耕の邪魔をしていくわけです。そして海の神であると同時に洪水や嵐、暴風雨のような水に係わる神なんです。最後に根の国・底の国、罪、ケガレを消す所にいるのは神話上はイザナミノミコトとスサノオノミコトです。いずれも日本の土着文化、稲作以前の狩猟・採集に重点を置いた文化だと思います。そういう神神の物語で強く語られるのは屎尿の重要性です。稲作農耕になると制度の中で綺麗なものとケガレたものに分ける二元的な思考になる。農耕以前の文化の中に屎尿が持っている生命力を高く見るという文化があったのではないか。イザナミが屎尿から水や土の神を産み、スサノオノミコトが屎尿で神殿を汚すような行為の中に稲作以前の文化伝統が神話的に表現されていると思います。それから三輪山の神が屎まる所に降りてきて娘をはらませるというような事もやはり同じですね。

安藤　禊をするとケガレは水の方に移りますが、最後にハヤサスラヒメが浄化して無くす。しかし、途中で水が次第に綺麗になって行く、そのようなものについての神格化はされていないのですか。つまり浄化力の神格化ですね。

　それから汚れた水を川に流すのでなく、穴を掘って地下に吸い込ませることがあります。その場合、位置を決めるのに鬼門はいけないとか、汚すことはいけないという観念がありました。この点はどう考えれば良いのでしょうか。

鎌田　浄化する力の神格化も存在します。マガツヒノカミ、ナオヒノカミですね。マガとナオとは、ケガレとハレのような関係にあります。ケガレを元に戻すためにハレを入れる。それが祭です。それと同じように、マガつまり曲がったものを直す力ですね。直してリフレッシュされる。

　それから先程のハヤサスラヒメに至る四神はそれぞれの働きを神格化しているわけです。きちんと役割を分けているわけで、水の神にもいろいろな種類があるのです。

　次に鬼門は、藤原京や平城京に都が建設された頃に遡ります。陰陽五行説ですね。中国の陰陽説を導入してくる。都や神社の位置もこの説や風水説で決める。古代方位科学ですね。鬼門はこの中から出てくるわけです。それなりに理にかなったことでもあるのです。陰と陽の変り目の方向とか時間ですね。鬼門はそこに当たるわけです。方位なら北東ですね。時間ですと丑三つ時ですね。陰と陽が切り替わる一番曖昧な時や場所ですね。そこが一番恐ろしいわけです。だからケガレがそこに結び付くことを避けるわけです。

多田　東アジアの神話と日本の神話の類似性はどんなところでしょうか。

鎌田　オオゲツヒメの死骸から穀物が産まれてくるという神話は、東南アジアやポリネシアに普遍的に見られるものです。

兄弟が国を作っていくという物語も東南アジア一帯に見られます。南方系の神話伝承が海の民によって海流伝いにもたらされたようです。南の方は稲作も関係があり、稲作以前の芋等も関係がある。言葉も一文字で意味を持つものには南方系にも類似の単語があるようです。一音で意味を現す言葉は大変根源的で重要な言葉である。

天尊降臨の伝承は朝鮮からツングース等北方系の伝承と関係して来ます。騎馬民族説というのもありますね。藤原氏は朝鮮半島の文化とかなり深く係わったと思います。聖徳太子がまとめ、その後焼失した天皇記、国記と現在も読むことの出来る古事記、日本書記とはかなり違いがあるのではないかと思います。両者には約百年の時代差があるのです。この間に仏教の定着があり、藤原・中臣一族の台頭があり、しかも女帝の時代が続いた。だから相当の違いが予想されますね。

稲場　神話の中に汚水という言葉はありますか。

鎌田　無いと思います。屎と尿と嘔吐、これ以外は無いと言ってもよいでしょうね。神様の体から神様が産まれてくるわけです。汚水というのはかなり抽象的な観念なんです。おそらく神話の形成期には汚水という感覚が無かったと思います。

参考文献

鎌田東二、『神界のフィールドワーク』青弓社、一九八五年
〃　、『翁童論』新曜社、一九八八年
〃　、『老いと死のフォークロア』新曜社、一九九〇年
〃　、『聖トポロジー』河出書房新社、一九九〇年
〃　、『異界のフォノロジー』河出書房新社、一九九〇年
〃　、『記号と言霊』青弓社、一九九〇年
〃　、『場所の記憶』岩波書店、一九九〇年